

せ た か む い

発行・古平町史編集室
古平町文化会館 42-2590
第160号・平成15年1月1日

年表で読む

古平の歴史

《66》

金融機関の移り変り

■盛んだった無尽講

庶民の一般的な金融として古くから行われ、大きな人気があったのが無尽講であった。

発起人が規約を定めて一定数の仲間が集まると、定期的に講の仲間が集まると、定期的に講（集まり）を開いて掛け金を集め、抽選や入札である金額を貸し出す。借りた人は一定の利息を払い、満期になったときそれが講の配当になる。

ところが、うまく進んでいれ

ば何事もないが、方々で無尽講が盛んになるとその運営に問題も起きてきた。

先に借りた人がその後掛け金を払わなかったり、講元（世話人）が掛け金を持ったまま行方をくらましてしまいい、講員（無尽講の仲間）に被害の及ぶことも珍しくなかった。

三山神社の大川社掌も無尽講で不祥事を起こし、神社は、その後氏子によって再建されたというところもあった。

大正6年には法律によって政

府が監督し、警察署の許可を受けるようになったが、中には楽しみてこっそりやるものもあり、「無尽がつぶれた」というとそれが町の話題でもあった。

■沖村に互信会が組織

明治40年頃、沖村では大沢吉三郎の提唱で、沖村の有志が一定の資金を持ちより互信会を組織した。主に漁業者に対して貸し付けを行っていたが、古平信用組合の設立により解散した。

■共益会の創立

明治41年、古平同志倶楽部を結成していた梅野吉太郎ら6人が、中小業者への金融を目的に共益会を創立した。会員は14人で、一定額を毎月掛け金とし、これを貸し付け運用して利殖を図ろうというものであった。

この共益会は明治33年にできた産業組合法による、信用事業を経営するという目的で、まず実地の経営を体験しようというものであった。

この公益会が、後の古平信用組合の母体となるものであったが大正7年に解散した。

■銀行の進出と閉鎖

日本で最初の銀行である三井銀行が、明治20年に主として公金取扱のために古平に出張所を出したが、開設して6年後に、日本銀行の業務拡大に伴い、道内各地の出張所と共に閉鎖になった。

■余市銀行古平支店設置

翌年（明治27年）余市銀行が設立されたが、営業を始めたのは明治30年9月で、同月10日、漁業者に対する融資を主として港町30番地に古平支店が設置された。

■小樽銀行古平支店となる

同年12月、余市銀行は小樽銀行と商号を変更して、小樽銀行古平支店となった。

その前の明治28年、小樽貯蓄銀行が設立され、後志では古平・余市・美国・岩内に代理店が置かれ、古平では小町安右衛門が代理店となって漁業者の預金を取り扱っていた。

しかし、明治34年、全国的な不景気から商店の破産が相次いで業務が行き詰まり、小樽貯蓄銀行はわずか6年でこの年閉店してしまつた。



賀正

二〇〇三年元旦

古平町史編集室
室長（総編集）成田昭彦・（発起）村井芳男

〈大正11年〉

▼2月16日 天気が良くナギで磯が干せているので、海草採りの人が大勢出ていて春らしくなった。刺網も六〇〇間程出た。○漁場へ網三〇反を届ける。薄

利だが追々建網の販路を拡張せねばならぬ。刺網より大口で世話がないのでよい。午後一時から役場で農会役員会があり行

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【61】

から千五百円あった。夜、五時から学芸会があり行く、広い運動場も満員だ。有益な面白いものをやるものだ。帰りは二一時世の中の進歩と共に学校も変わって、演劇のような種目もやるようになった。

▼2月18日 店は今日も忙しい。刺網現金で四〇〇間貸して二千百間出た。期間はまだ向こう一か月あるから一万五千間く

く。農会の真崎技術員についても相談する。四時頃帰る。この頃は幾分日が長くなったような気がする。漁夫も二三、四日頃から来るそうだが、浜も賑やかになるだろう。小樽へ注文した店の名刺と認印が今日届いた。

▼2月17日 朝早くから客があり忙しい。ヤマセで海は大時化だ。厚古から網、アバ縄の客があり一〇〇余円現金で出る。現金売りが全部で一五〇円程あった。貸売りと合わせて千四百円

らしいは出るだろう。一万間程いま発送中の分があり、近々着くはず。これを売れば万々歳だ。古平では七分どおりは売ったが、アバ縄は昨年四千丸売ったので、今年もまだ相当出るだろう。寒風が吹き海は大時化だ。今夜新地座で学芸会があるというので幸治は四時頃行つた。

▼2月19日 一昨日来の大時化もナギて海は静かだ。浜へ出て見る。カレ網は皆出たが、魚が安いので元気がない。カレ網

一方、小樽銀行古平支店は明治32年、同じ港町41番地に移転したが、明治35年、港町から新地町51番地に移転すると、美国町大字船瀬村に古平支店美国派出所を開設した。

明治37年2月、日露戦争が起ると国債の募集を始め、これを取り扱うため小樽銀行古平支店へ明治35年1月31日、新地町に小樽銀行古平支店新築移転する

店に、日本銀行小樽出張所臨時派出所が、翌年、戦争が終わるまで置かれていた。

■北海道銀行古平支店となる
明治39年5月、小樽銀行は(北海道商業銀行(元・屯田銀行)と合併して北海道銀行と改称した。

この屯田(元)銀行が明治27年、古平支店を設置した(旧・拓銀資料)とあるが、そのことについてはよく分からない。

(この項続く)

余曰で 紙面の文体を文語体にし、数字も新聞にならって算用数字に代えてみましたがいかがでしょう。

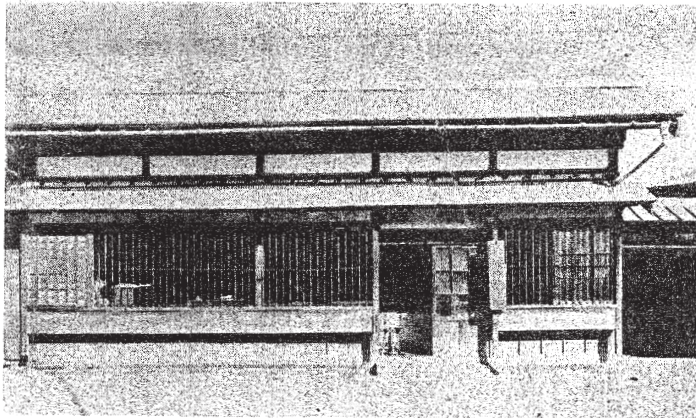
▼「金融機関の移り変り」は、二、町史編さん委員会越中委員長に助言をいただきました。ありがとうございます。(次回は古平信金)

▼今月号は執筆者が多く、一ページずつで勢揃いいたしました。

▼高野名幸、渡辺嘉之から資料をいただきありがとうございます

▼ふるさとのアルバム《古平の建物》が出来ました。ご覧ください。

▼『せたかむい』の入手ですが、現在は古平、浜町両郵便局・文化会館・湯田温泉・福祉センター・海洋センター・役場などに置いてあります。



は結果が良くなかった。一月中は時化続きで打撃を受けたようだ。古英丸が入港。荷物五個が着く。伏木からの船が網二万間程を積んで入り、品切れを心配していたがちょうど良かった。新地座で今日も学芸会があるが、幸治はカゼ気味で休む。

▼2月20日 この頃すこしカゼ気味であったが良くなった。午後一時から役場で農会の総会があるので行く。今年リンゴの作が良ければ、品評会でもやるかということになった。四時に帰る。㊦の子どもが昨日から重体で、今夜八時、富丸を貸し切つて小樽の病院へ直航した。一時頃、戸外へ出て見る。風もななく、満天の星が輝き静かな夜だ。

▼2月22日 九時頃来岸から客網六〇〇間買いに来た。三時に出発して来たという。島泊からも大村さん一行が五人連れで来て三〇〇間出た。㊦の子ども昨夜亡くなつて、三時頃余市から帰るといふので、父が浜まで出迎えに出る。文治と同じ二年生だといふのに可哀そうなことをした。明日の通夜だといふ。夜、鶴間さんの通夜に行く。

▼2月24日 昨日あたりから発動機船や汽船で漁夫が続々と入り込み、町中はいよいよ鯨場気分となつてきた。昨日は福山地方から五、六〇人来たといふ。古英丸が入港し、合羽(ぎば)や合羽ズボンなどが着く。㊦の葬式で父と妻が行く。

▼2月26日 朝から雪が降り寒く、また寒中のようになつた。店は建網の注文もあり忙しい。五〇〇余円の貸し売りの。アメリカから客があり千間余り出た。一日中客が切れず忙しい一日であった。三月初め頃までは忙しい。電話の取り付け工事に来る。間もなく開通するだろう。漁夫も八分どおり来て、浜は雪引きや船出しなどと賑やかだ。月末の帳簿の整理をする。

▼3月1日 先日来、小春日和のようであつたが、また冬が来た。今日は朝から吹雪で店の板戸も閉めたままだ。寒さも強く吹雪もひどい。今日も刺網が千間程も出た。古宇から代金引き替えて改良網の注文が来た。とにかく刺網として近郊に名が売れた。今後大いに勉強して活動せねばならぬ。近頃、また古

平で流感が出てきたようであちこちで休んでいる。古英丸が入港して荷物が着く。タラ釣りの連中へ知らせる。夜、㊦の老婆の通夜に行つたが、吹雪と寒さで閉口した。

▼3月2日 七時頃から客がある。就寝中も値段などの問い合わせがあり、建網も支度で忙しいようである。タラ縄を買い客が来る。一時は一〇人余りの客で売出のような忙しさだつた。㊦の葬儀があるがなかなか出られない。一〇時半に葬式に行つたが、なかなか立派な葬式だった。天気は良いが寒さが厳しく、寒中のようなものである。この日の貸売りは一番多い。当座帳に三枚半にもなつた。毎日このぐらい出れば一〇万円を超えることになる。夜、支店のふろへ行く。

▼3月3日 起床八時、就寝中から建網の客がある。今日も吹雪だが忙しい。この吹雪の中、電話工夫は前の角の電柱に上り、鼻歌まじりで仕事をしている。電話も四、五日中につくだろう。今のところ電話が一番必要だ。①、種金、今井、熊木、美国

の笹川などから電話があり、㊦へ行くやら困へ行くやら忙しかった。貸売りはずいぶんあつたが、現金は三〇〇円余りしかない。刺網は合計千二百間程出た。あと六千間程手持ちがあるが、一五日頃までにはあと三千間は出るだろう。美国から相当の客があると見込んでいたが、少々見込み違いだった。夜は星が輝き静かだ。明日は天気ならん。

▼3月4日 快晴、カレ網は皆出た。建網の支度の時期でずいぶん忙しい。古英丸が来て、建網のロープ類が着いた。午後一時、吉井旅館へ小樽税務署から営業税調査員が来て、出頭せよとのことで行く。金額に折り合いがつかず帰る。

▼3月5日 就寝中に積丹から久吉田さんが刺網を買いに来る。その他で合計刺網五〇〇間程出た。刺網は今までで九分どおり出たのでこれで一段落だ。建網が忙しい。困積丹漁場、㊦庄司漁場、㊦今井、他、建網がずいぶん出た。種金へミゴ縄五〇〇間現金で出た。実に今の現金はありがたい。今日は貸売り千二百円余り、現金一八

○円。これから一〇日まではこの忙しさが続くだろう。午後四時頃 吉井旅館の税務署員のところへ行く。結局 双方折り合いをつけ五時帰る。夜 圓さんで部落会の会合があり行く。

▼3月6日 六時頃から客がある。刺網は一段落したが建網が忙しい。ずいぶん暖気になった。積丹田漁場から船が来て、ロープ、その他が出る。日司の斉藤から電話で刺網の照会がある。

▼3月7日 朝は好天気、今日も相変わらず忙しい。日司の齊藤から刺網五〇〇間入用とのこと。五月支払いにしてくれるかとのことだが、初めてなので断ると、明日、現金で買いに来るといふ。先月二五日発送したという荷物が四個着く。割合早かった。早速通知したら大谷、山下、畠などで取りに来た。

▼3月8日 建網の客が早くから来る。一番忙しい時期だ。天気は良いが寒い。沱清水の社員が来て、建網、勉強するから現金で買ってもらいたいとのこと、今どき現金で仕入れ間に合うものではない。刺網三〇〇間売れる。残りあと五千間ぐらいになる。

った。このあと二千間売れば手持ち三千間で、これくらいなら万歳だ。カレ網が予想以上に残ったのは見込み違いであつた。一千円程の残品には閉口だ。電話工事の人夫十人余りが盛んにやっている。近々中に出来るだろう。一番忙しい時期に電話が無いのは困る。

▼3月9日 相変わず建網の客で忙しい。岩糸、ミゴ縄、網などの通帳付けで忙しい。例年は積丹、美国、湯内方面から刺網の客があるのに、今年は割と少ない。代わりに建網が相当に出る。群来村の高田へ刺網二〇〇間出た。夜は風に雪がまじり荒れ模様。困で三等郵便局長の交渉を受け、書類提出に当たって家で保証人になった。

▼3月12日 相変わらず忙しい。今年には建網用品を相当に売った。アバ縄二〇丸も出る。昨年からはアバ縄をずいぶん仕入れたが、売るも売った。五千丸から仕入れたが、実に破天荒なことをやったものだ。しかし幸い安い時であり、その後値上がりし、八分どおり売り切ったのは先ず成功と喜ばねばならぬ。

▼3月13日 起床七時、春景色だ。海はナギて浜辺は賑やかだ。店は建網の客で相変わらず忙しい。此の店員が、荷物を間違つて送つたことについて弁明に来る。

▼3月14日 店は今日も忙しい。今日は大安吉日ということ
で、網卸しの祝いをする家が多い。海は上ナギ、浜辺は日の丸や
五色の旗で賑やかだ。刺網や手
間取りの連中も、畑方面から来
る者家を借りる者と大勢いる。
昨日着いた岩糸山下、丸、平、
全、長などへ届ける。

▼3月15日 建網連中はたい
てい支度ができ、昨日、網卸しを
した。店ではアバ縄、ロープ、網
類が出る。今日から店の電話が
開通した。一一一番だ。一時から
町内だけ開通。町外とはまだ通
話できない。子どもたちが珍し
がつている。朝からの雨風も夜
に入り静かになった。

▼3月16日 快晴 上ナギ。鯀
場らしくなった。ロープ、ボイル
油など売れ行きがよいが、割と
ひまな方だ。西河から五分ロー
プ三〇尋買いに来た。午後浜へ
出て見たがどこも投網に忙し

く、ヤーレンヨーイサの掛け声が聞こえて、いよいよ鯨場の気分になってきた。子ども等が大勢遊びに来ていて、サンパの中でコマ廻しをしている。

▼3月17日 朝からの雨で、雪が消えるのがわかるようだが、まだ雪は例年より多い。昨日あちこちで投網したが、まだ鰯は獲れぬ。何と言ってもまだ彼岸前、この気候では二、三日頃だと思う。今日から電話が町外とも通話ができるようになった。

▼3月18日 朝から雪が降り寒い。一六日投網したがこの雪で網を揚げた。町はさびしい。銀行の帰途、畠へ寄ったら網こしらいをしている。三に寄り彼岸だんごを馳走になる。東京では去る一〇日から平和博覧会が開会され賑やかとのことだ。夜父は坂下さんの網卸し祝いに招かれて行く。

▼3月19日 朝から雪が激しく、こんなに雪では鯨場らしくない。この分だと初鯨は二三、四日頃か。彼岸の命日でオハギをつくる。熊さんは㊦の浜へ雪投げの手伝いに行く。(続く)

作家 田中澄江

大 澤 文 子

三人の子らがそれぞれ「わが道をゆくよ!」と旅立っていった頃、私には色々な仕事が続っていた。

まず昭和三十九年四月一日付で町の民生児童委員として任命された。今までは別の仕事と想っていたのに。だが以前から「大切な福祉国家である」と、充分認識はしていたが。

「私につとまるならば……」即座にお引き受けしたのは言うまでもない。四十代後半だったろうか。それから自分なりに、処々から福祉の本を借り、大事な個所を抜粋して勉強してみた。だがむづかしい。

月一回の民生委員会議に初めて出席した。総務は阿彦氏、副総務は岩間ヨシさんと菊地スエさんだったと記憶している。年に何回か研修で地方へ出かける。岩間さんとも何回か同席

し、夜には旅館で疲れを癒し、布団を引き寄せ朝までおしゃべりした懐かしい思い出もある。

幾年か過ぎ総務は金子藤一氏、私が副総務となった。その頃には悩み相談員となったような日々が多々あった。

「悩みがあつてなア」と、はるばる別の地域からでもお年寄りが相談に見える。そんな時にはゆつくり時間をかけて、悩みと

いうか口説き話をゆつくり聞いてあげる。だが私流の解決案は絶対出さない。幾度もお茶を入れ替える程の時間をかけて話を聞くことにする。夕方近くになり海も鈍色に変わる頃になると、訴えていたお年寄りも穏やかな顔を見せ「また来るなア」と歩足も軽やかに去ってゆく。

「仲よく元気でネ」私はつぶやきドアを閉じるのだった。いつか札幌の厚生年金会館で

開催された「道民生児童委員大会七十周年記念式典」に出席した時のこと。表彰式後、作家・田中澄江氏の講演に接する機会を得た。鳴り止まぬ拍手の中に緞帳があき、椅子に掛けた小柄な田中氏。ワインカラーの和服が目を見張る程かわいらしく映った。

開口一番「ただ今、大会の資料をいただきましたが、私の紹介欄に明治十四年生まれとありましたので驚きましたネ。十四年生まれでしたらもう百歳を超えてますものネ、フフ……」ミスプリントを作った当局にチクリとやわらかな指摘。

「でもいいですよ。日本の最長寿者であつた泉重千代翁にあやかって、私にも長生きをなさ」ということでしょうから、私は明治四十一年生まれの七十八歳です。ありがとうございました。」

「ウワアお若い!」一瞬会場にどよめきが起った。気どりのなく、気さくに話される物腰に「作家田中澄江」を感じた。氏は好奇心旺盛、趣味として山登り大好き、年間五十回

登りを励行して、いま現在で八百回という。どんなことをしても千回を現実したい。あと四年間で達成できるとにこやかに微笑まれた。

「実は北海道に着いた昨日も二セコのメクンナイ岳へ登って来たんですよ。シラネアオイが美しく咲いていましたネ」

「ウワア! すごい!」再び会場にざわめきが起った。

気どりもなく、気さくに話される物腰に、再び「作家田中澄江」を感じた。

千回達成を心から祈りつつ帰途についたが……。果たして達成されたかしら……。心が痛む。

その後、札幌へ移転のため、昭和六十三年八月三十一日付けで私は退任させてもらった。昭和三十一年四月一日に任命されてから、何の事故もなく任務をなし終えたことを委員の皆様から感謝したい。

なお、厚生大臣藤本孝雄様、北海道知事横路孝弘様から、昭和六十三年八月三十一日付けで感謝状を受けた。大事にした

古平いろいろはうた

あ 赤い崖フレービラが名の起こり (続き)

□地名についての諸説

古平町内の大字名について、簡単に述べてみます。

○沖 町

ラルマニオンコ(水松)の群生するところ。沖村川流域にはオンコがかなり生えていたらしい。ある本には「ところどころに、オンコに近い種類のイヌガヤが自生している」と書いてあるが、確かめてはいない。

和人はラルマキと言っていたが、明治2年、御木村となる。その後、沖村となり、昭和31年に沖町となる。

沖村川にかかる橋は『ラルマキ橋』と命名されている。

○歌 棄 町

オタシュツ・オタスツⅡ砂浜の海岸が、大きな石(ごろた石)の転がっている海岸へと続く辺りのことを言っているようで、歌棄という地名は全道にも多く

見られる。

明治2年、歌棄村となるが、昭和31年に歌棄町となる。

○沢 江 町

メナシトマリⅡ東風のとき(風を避けて)舟が泊まること。明治2年、沢江村となるが、昭和31年、沢江町となる。

○浜 町

オタネコロ・オタニコロ(オタ・ニコル)Ⅱ崖と海にはさまれた狭い砂浜、山が海に迫っているところ。これというとチョペタン川河口辺りのようにも考えられる。

古平から見えて美国川手前、その辺りの地名もオタニコロと言われていたが、やはり山が海に迫っていて、海岸は砂浜である。海岸の地形から浜中という地名は全道にも多い。

浜中という地名は古くからあり、明治2年に浜中村となり、

明治12年、浜町となる。

○港 町

カムイ・ミンタラⅡ神・庭・熊のいるところ、他にも同じようなアイヌ語地名があつて、必ずしも熊のいるところではなく、神様が来て遊ばれる広場で、神聖な場所、という意味らしい。どう和人が訛ったのかその後、ミミタレ、タレヒミなどと言っていたが明治2年垂美村、明治12年に湊町となる。港町となつたのがいつかは不明。

○新 地 町

モヤサン・モヤサムⅡ小さい坂(今のふるびら温泉のそばを通つて美国へ通じる坂道か)、また、海岸沿いの道と、坂道の出会うところ。と考えると、今の港町から新地町十字街、さらに進んだ辺りのことか。

明治2年に新地町となる。

○入 船 町

ボクサムⅡ(丸山の)陰、(丸山の)傍(そば)ということから、丸山の下、丸山のそばという意味であろうと思われる。

また、後年になって丸山のふもとに祠を建て、弁財天を祀っていたことから弁天とも呼ばれていた。

いた。

○御 崎 町

入船町と丸山町の一部を分割して御崎町となる。

○丸 山 町

古くは丸山岬が突き出た南側の入り江で、御崎町から近い辺りを、とまり、べんざいとまりⅡ泊り、弁財泊り(船瀬)と呼んでいた。明治7年、種田金十郎が湿地帯を埋め立て造成した。明治12年に新地町・入船町の一部を分割して丸山町となる。

丸山町の地名のいわれについては他にもある。

○本 町

昭和31年に丸山町を分割して本町となる。それまで、便宜的に丸山町を第一町内・第二町内と分けていたが、丸山第二町内が該当する。

○群 来 町

ヘロカライシⅡ何日も鰯の獲れるところ。その意味から訳して群来村とした。昭和31年に群来町になったが、古平の大字名で、戦後までアイヌ語で呼ばれていた地名である。古平の人の多くはヘロカライシと呼んでいた。同じ地名は道内にも多い。

船泊りのまち

吉 川 義 雄

大正・昭和・平成と、駆け抜けてきたような自分の人生を、嫌でも振り返って見る年代になった。

われながら、八十歳という年齢も驚きだが、容易に順応できない。時代相の変化に呆れたら、酷評したり、悲しんだり、怒ってみたりの昨今である。

少年時代、眼前に広がる青い海には、必ず遠く近く、白帆が点在していた。大きな和船（弁財船）が、前浜に静かに錨を下ろしていた。

浜町の本校に通ってたから多分五、六年生だったと思うが、わが家と押味さんと共同経営の川崎船が、本陣の浜に揚げられ何やら改造工事が始まった。

その頃、一部の保津船（ほつせん）に、電気着火（でんきしゃく）と呼ばれる動力船が現れてはいたが、

どうもそれとは別なモノらしく、下校時、私は毎日のように本陣の浜に立ち寄って、もの珍しそくにのぞいていた。

電気着火とは、馬力の違う焼玉エンジンのハシリだったようだが、出漁時の勇ましい姿とは打って変わって、いつも仲間の船に引かれたり、櫓（こ）を漕いで帰った来たりの、惨めな姿であつた。

先達とは、いつもこうした悲哀を味わうものかも知れない。ナイロン網のときも、魚群探知機のときも、一歩先に出れば必ず嵐が待っていて、容易に賛同はない。

にしんに見放されても、すけそうに活を求め、それも希薄になると遠洋漁業の百（もも）船を押し並べる。その時々には必ず勇氣ある先達がいるはずだ。

少年の住んでいた静かな船泊りの湾内には、時代と共に多くの変化あるドラマが繰られ、新しい価値を求めてみんな真剣に行き抜いて来たのだ。

そのまちは、離れても、帰っても、わがいのちの故郷であり、船泊りの安らかさがある。その思いで結ばれている人達が、どこに船出して交流を忘れない。

たった今し方、宮森敏夫さんの娘さんが家から帰って行かれた。老夫婦のところへ食べられない程のみかんやら、アスパラやら、私の好物のそばを置いて行かれた。古平生まれの彼女ではないが、亡き父と私の交流を知っておられるからだ。

死ぬまで古平弁を離さなかった、父のことを懐かしく話してくれた。

戦後、古平に復員してから十年間、多くの仲間を得た。東京の斎藤嘉勝君と夫人の愛子さん。私と同様、昨年脳梗塞にやられた嘉勝君からの文通は途切れがちになったが、時々電話の向こうからしおがれこえを送っ

てくる。

役場時代、暇さえあれば気易くお伺いしていた福岡菓子店さん、次女の邦子さんは余市に嫁いでおられ、「字が下手だから」と断って、時々電話をいた

だ。古平の話しが尽きることなく続き、私は電話料をハラハラする。

年末近く、ドンと小包を届けて下さるのは吉野浩次君と葉満さん。浩次君は亡き富雄君と共に私を扶けてくれた、古平青年会の大幹部。葉満さんは丸山町で向かい合わせの隣人。「数の子は、やっぱり古平ものがおかしい」と、家中の者が喜ぶ。

届くと、「ああ、よかった」と、そのご健在を喜ぶのは、大先輩田岸倉治さんからの賀状。

旅行先からでも、葉書に近況を詳しく詰め込んで報らせてくださるのが浅利（旧姓高野名）喜美子さん。（続き多し次回に）

時代がどのように変わっても、あの美しい船泊りから旅立ったことに変わりはない。その価値は無限の大きさがあり、生涯かけて感謝を忘れまいと思う。

中 戦
中 戦

泣き笑いの
樺太漁場体験記

後 戦
後 戦

吉 野 慶 一 郎

そして迎えた八月 例年、野
一五日（続き） 田町では

八月一五日になると、郷土出身
の戦没者の招魂祭（慰霊祭）が
行われます。お盆中のことでお

墓参りもあり、神社やお寺は久
しぶりの人出で大いに賑ってい
ました。戦局も激しさを増して

来た時勢ですが、せめて今日、
この日ぐらいはという願いから
か若い女性たちも服装を整え、

きれいなモンペ姿が殺風景な街
にも明るい色どりを添え、和や
かな光景が人々の心にも何とな

く安らぎと潤いを感じさせまし
た。私も在郷軍人（昭和一九年
帰還）として招魂祭に出席して

いましたが、正午に重大放送が
あるということで一し頃に解
散、帰宅しました。

そして、いま見て来た、心和
むような平穏な光景を最後とし

て、わが野田町が、いや樺太の
領土が、一瞬にして日本の国土
で無くなる現実を思い知らされ
たのはこの直後のことでした。

―前回までの八野田町からの
避難行Vにもどる―

情報も無く 先に、漁船で野
不安な日々 田から出港した

船団の安否が不明なままに、初
七日の法要は行ったものの、心
の中では皆がその無事を祈って

いました。

何とかして、真岡の情報を得
たいものという手を尽くし
ましたが、はつきりしたことは

全くわからないままに不安な日
を過ごしておりました。

ソ連軍が野 そうこうしてい
田町へ進駐 るうちに、真岡
を占拠したソ連軍から野田町役

場へ連絡が入り、「これから野
田町へ進駐するが敵対行動など

ないよう、平穏にことが進むよ
う対処するように。」というも
のでした。

終戦という協定の中で、真岡
では不意にソ連軍が侵攻したの
で、日本の守備隊との間で交戦
となり、不測の事態から悲劇が
起きてしまいました。

野田町では進駐に備えての協
議をし、町民には戦闘の意志の
ないことを伝え、見通しの立た
ない今後の不安な生活を考え、

ここは平穏のうちに進駐を終え
たいとのことから、当日は町を
挙げて、港でソ連の進駐部隊を
出迎えることになりました。

やがてその当日、入港する前
にソ連軍の艦艇から拡声器で声
明が流されました。そして、上

陸して来る先頭の船には野田警
察署長が乗っていて、マイクで
町民に平静を呼びかけてしまし

た。ソ連軍は、入港に当たって
警察署長の呼びかけにより、進
駐に当たって混乱のないことを

期待したのです。
ソ連軍に家族 順調に進駐が
の調査を頼む 終わりに、ソ連

軍との会談が行われましたが、
その席上で、さきの野田港から

出港した、どこでどうなってい
るのかもわからない、引き揚げ
船団のことについての調査を頼
みました。

そうしたところ、翌日になっ
てソ連軍から役場に電話で連絡
が入り、野田を出港した船団
は真岡にいて、人も船もみんな
無事であることが確認されたの
です。しかし今は、全員が収容
所に入れられているのですぐに
は帰れないだろう。だが、人と
船は北海道ではなく、全部野田
へ帰す、というものでした。

喜びの陰に しかし、無事で
別の不安が あることがわか
り、残っていた家族や親戚の者

たちはようやく安堵の胸をなで
おろし、歓声をあげてその無事
を喜び合いました。初七日の法

要のことなどすっかり忘れてし
まって、久しぶりに皆に笑顔が
もどったのでした。

だが、まだ心に懸かることが
ありました。大泊へ向けて出発
した母と娘たちのこと、山形の

酒田港から到着の電報をよこし
たままのその後の船の安否でし
た。悩みは尽きないまま日は過

ぎていきます。
(続く)

― 召集令状 ― (続き)

夜、一〇時の列車が来るまで時間があるので、金子君と二人で彼の行きつけの居酒屋へ行くことになった。居酒屋の主人も喜んでくれ、まだ宵の口なのに暖簾を下ろし、私たち二人のためにご馳走を出して壮行会をしてくれ、饂飩別まで頂戴した。小樽の人の人情の厚さに感謝しながら店を辞した。

定刻に指定の列車に乗る。同年齢の召集兵ばかりのようで相当の人数だった。樺太から来たという人もいる。青森に着くと秋田の連隊へ行く者、盛岡の連隊へ行く者がここで別れることになり、藤田君、金子君らともここでお別れする。

本間君、田中君と私は盛岡へと向かった。盛岡駅に着いたのは夕方だった。駅の近くの指定された旅館へ集団で一泊して明日の入隊を待つことになった。

夜、同室の八人で地方人として最後の夜を楽しもうと街へ出

て、しゃれたレストランでアスパラガスを食べながらビールを飲んだが、明日の入隊のことを考えると先ず不安がつり、とても気持ちよく酔うことができない。これは何も私だけではない。明日から別世界の

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

— 2 — 桶 義 春

は入隊しては。明日から別世界の中心へ入ってゆくのだ。相当の覚悟がいると思うのだが、さてどうなるものか。自分にとっても全く未知の世界、自分でもわからない。いろんな思いが頭の中を駆けめぐって、やがて不安な一夜が過ぎていった。

をする。一中隊と二中隊に分けられ、私たちは二中隊へ配属になった。班長は竹田軍曹、班付き教育係は三年兵の檜岡上等兵と二年兵の一等兵と二人だ。私たちの班は初年兵だけの集団教育となっていたので助かった。同年兵は北海道出身者が多く、古平町の外余市町・美国町・岩内町などで、漁師を職業としている者が多かった。体力に自信のありそうな彼等を見ていると何となく自分が貧弱に見えて、彼等と共に行動ができるのかと心配になつてきた。大変なところに来たもんだと思った。

― 内務班での生活が始まる ―

生活が始まる ―

内務班(軍隊生活で室内での生活・訓練を行う)は廊下を挟んで二つに分かれている。私たちの部屋は檜岡上等兵がいつし

で、部屋の中には高さ五〇センチ程の二人用の木製の寝台が一つあるだけで、この寝台には檜岡上等兵と私が藁(わら)ぶとんを二つ並べて寝るが、外は床に藁ぶとんを敷いて寝ている。同年兵で私だけがひとり高いところ

ろで寝ているので、何かと目立つ存在になる。班長の配慮で、私たち同級生は三人並んで寝るようになっていた。

班長から自己紹介と班付き教育係の紹介があり、班長は恰幅(かちふ)のよい好感のもてる人だった。教育係の檜岡上等兵も第一印象がよく好人物のように思われた。もう一人の教育係である一等兵は青白い顔のデブで、ニコリともしない意地の悪そうな感じを受けたが、後になってそれが予想通りとなり、私たちは初年兵の嫌われ者であった。陰では彼のことを白ふたというあだ名をつけてうつつぶを晴らしていたが、今でも彼の名前を思い出せない。

軍服や軍靴の支給があり、それが体に合わないものばかりで音をあげた者がいたが、

「文句を言うな。軍隊は人の体にあわせてものを作っているのではない、自分の体を軍服に合わせる!」と白ふたに一喝され、皆しよぼんとなったが、そこは初年兵同士で互いに融通し合い、何とか体に合いそうなものを選ぶことができた。(続く)

鰯(ぶり)街道と

ノーベル街道



富山市 高橋 藤蔵
(元・稲倉石鉱業所勤務)



鰯(ぶり)街道

寒鰯(かんぶり)の美味しい季節となり、ここ富山湾では鰯の富穫で港は例年になく賑わっています。

寒いこの季節の鰯は、脂が乗り身も引き締まり、一番の食べ頃となっています。

刺身もさる事ながら、煮ても焼いても格別で、更に、頭・皮

・ガラも捨

てるところ

なく料理に

供され、特

に大根を添

えた「鰯大

根」は、全



理となりま

した。

その昔、

越中の富山

を起点とし

飛騨の高山

や信州信濃

を結ぶ道を

「鰯街道」

と呼んでい

ました。

四方を高

い山に囲ま

れ海から遠

いこの地方

では、活き

魚を口にす

る事は殆ど

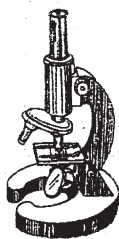
なく、せめ

コズクラ・ツバイソ	約 32 cm	約 600 g	当オ
フクラギ	約 40 cm	約 1 Kg	当オ
ハマチ	約 40 cm	約 1~2 Kg	1~2オ
ガンド	約 50 cm	約 4 Kg	1オ
ブリ	約 60 cm	約 7~6 Kg	1~2オ
ブリ	約 70 cm	約 7~8 Kg	2オ
ブリ	約 80 cm	約 6~10 Kg	3オ

てお正月だけは、新鮮な魚を食べるのが最高の祝膳だったそう
で、富山から高山や長野迄の長
い道のりを「寒鰯」を担いだ豪
の魚飛脚たちが、雪深い山道を
夜を徹して運んだそうです。
難渋しながら運んだこの街道
を、親しみをこめて「鰯街道」
と呼ばれていました。

また、鰯は成長と共に魚名が
次々と変わる事から、別名「出
世魚」ともいわれ、縁起の良い
魚と珍重されています。

ノーベル街道



ところで、この「鰯街道」と
その延長である名古屋までの国
道四十一号を「ノーベル街道」
とも呼ぶようになりました。

それは、この沿線に、昨秋か
ら年末にかけて日本中を明るく
包んだノーベル賞にちなんだ話
題が持ち上がったからです。

日本人のノーベル賞受賞者十



二名のうち、実
に五名の方の生
誕地・成長地・
研究地がズラリ
と点在している
のです。
出世魚を運ん
だ「鰯街道」が
いまは、出世街
道の最高峰であ
る「ノーベル街
道」ともなった
わけで、昨年受
賞された小柴さ
ん・田中さん
のお二人も、この
街道に深く関わ
っております。

富山市	田中 耕一 さん	化学賞	平14
富山県大沢野町	利根川 進 さん	医学生理学賞	昭62
岐阜県神岡町	小柴 昌俊 さん	物理学賞	平14
岐阜県高山市	白川 英樹 さん	化学賞	平12
名古屋市	野依 良治 さん	化学賞	平13

短歌

古平町岬短歌会

わが記憶のままに鯉塲書かれあり「せたかむい」に載る
幸作日記

ぬるき湯の流れに足を浸しつつか間歌泉の噴き出づるを
待つ

池田 てる

十一月二日季節違はず平地にも雪しんと降り街屋根
真白し

奥山 きよみ

振り上げて窓の辺に置くゼラニウム咲き初めしまま日日
に散りゆく

鈴木 時子

晩秋に手折りし小菊愛らしくオレンジ色の灯りのやうに

田中 香苗

晩秋の台風一過の日本海に色鮮やかに大きな虹たつ
キササゲは利尿に良しと家人は木の名を聞くに添へて
教へき

丹後 初江

俳句

古平ホトトギス会

観世音いだき丸山眠り初む 斉藤波留

秋日和孫に押されて車椅子 山口悦子

初雪や土手の草木の薄化粧 越野敏雄

晴れつく今はなやぎし枯野かな 大和田絵伊

山峡の牛舎に秋灯またたきて雷鳴伴ふ雨降りすぎぬ
巻かぬまま畑に残せし白菜は昨夜よりの雪に埋つもれて
おり

東 美知

指の先爪先までも表情を見せて踊れり舞台の歌友は

堀 典子

烏賊船のあかり間近き岬かな 関口勝志

冬日向手にとる本の埃かな よしざきり

膝頭揃へ園児の初点前 仲谷比呂古

波のこゑ礁より礁へ星月夜 越野清治

新聞のお節チラシに見入る夫 室屋弘子

漁火の吹雪の中を戻り来る 泉 清三

幸平 吟

床ぬくしトタン叩ける雨強し

鯖火燃ゆ寄り集まれる雄冬岬

ぬくもれば妻の手ありて風邪に臥す

大灘の鯖火点々固まれる

鯖火かも対岸の灯かも沖の闇



古平町史年表

— 8 —
明治11年～同15年

明治12年(1879)

- ◆郡・区・町村編成法が布告され、浜中村に開拓使第五大区古平郡区務所が置かれ、古平・美国・積丹を管轄した。
- ◆浜中村を浜町、垂美村を港町と改称したほか、新地町・入船町の一部を分割して丸山町とし、区長に出羽佐太郎が任命される。
- ◆戸長を沖・歌棄・沢江の三村に一人、港町に一人、入船町・新地町の二町に一人を置き、戸長の自宅を事務所としたが、その後、戸長役場と改称する。

△戸長の任命書▽

開拓使

古平郡沖歌棄澤江
三村戸長申付候事
准署外署月俸金七圓
明治十三年二月廿三日

幾井舊七

明治13年(1880)

- ◆開拓使古平郡役所が置かれ、小樽ほか三郡の郡長北川誠一が郡長を兼務する。
- ◆総代選挙を行い、入船・新地・丸山町・群来村の総代に梶目八三(初代)が当選する。
- ◆古平郵便取扱所が普通郵便事務と集配を始める。所長に石井常助が任命される。
- ◆沖小学校が開校する。
- ◆浜中学校が新築されたが、新様式のモダンな校舎であつた。(証・前号の浜中学校写真は、明治13年新築のものでした)

△古平郡役所からの辞令▽

古平郡役所

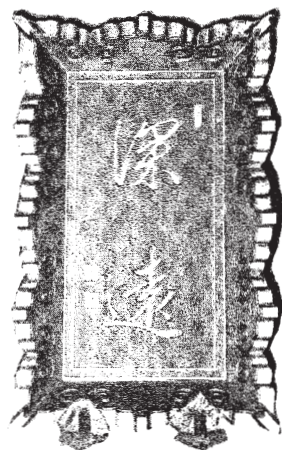
公立病院并古平郡
本支校経費取扱
専務差免其事
但是迄出納勘定細調書
以下戸長役場可引健
明治十四年九月十五日

原田久吉
関口利勝
幾井舊七

明治14年(1881)

- ◆戸長の区域が改定され、沖・沢江・歌棄村・浜町の一町三村に一人、港町・入船町・新地町・群来村の三町一村に一人となる。
- ◆開拓使庁の許可を得て寶海寺と公称し、本山の一般末寺となる。(明治二一年・本山から深遠山の山号を下附)

△寶海寺山号額▽



明治15年(1882)

- ◆開拓使が廃止され、函館・札幌・根室の三県に分かれ、古平郡役所は札幌県古平外二郡役所と改称する。
- ◆古平警察分署を新地町に新築し、戸長が警部を兼務し警察事務をする。
- ◆禪源寺が新地町から浜町に移築される。
- ◆石上皆応が沢江村に地藏堂を建て、明治21年、現在地に願雄寺を建立する。明治44年、小樽天上寺住職となり、石上文耕が願雄寺住職となる。
- ◆小町泰次郎が後志丸(25・3ト)ほか北国丸、美国丸を古平～小樽間航路に就航させる。
- ◆沢江小学校が開校する。

△沢江分校学籍簿▽

明治24年浜中小学校分校となる

